

Chair name

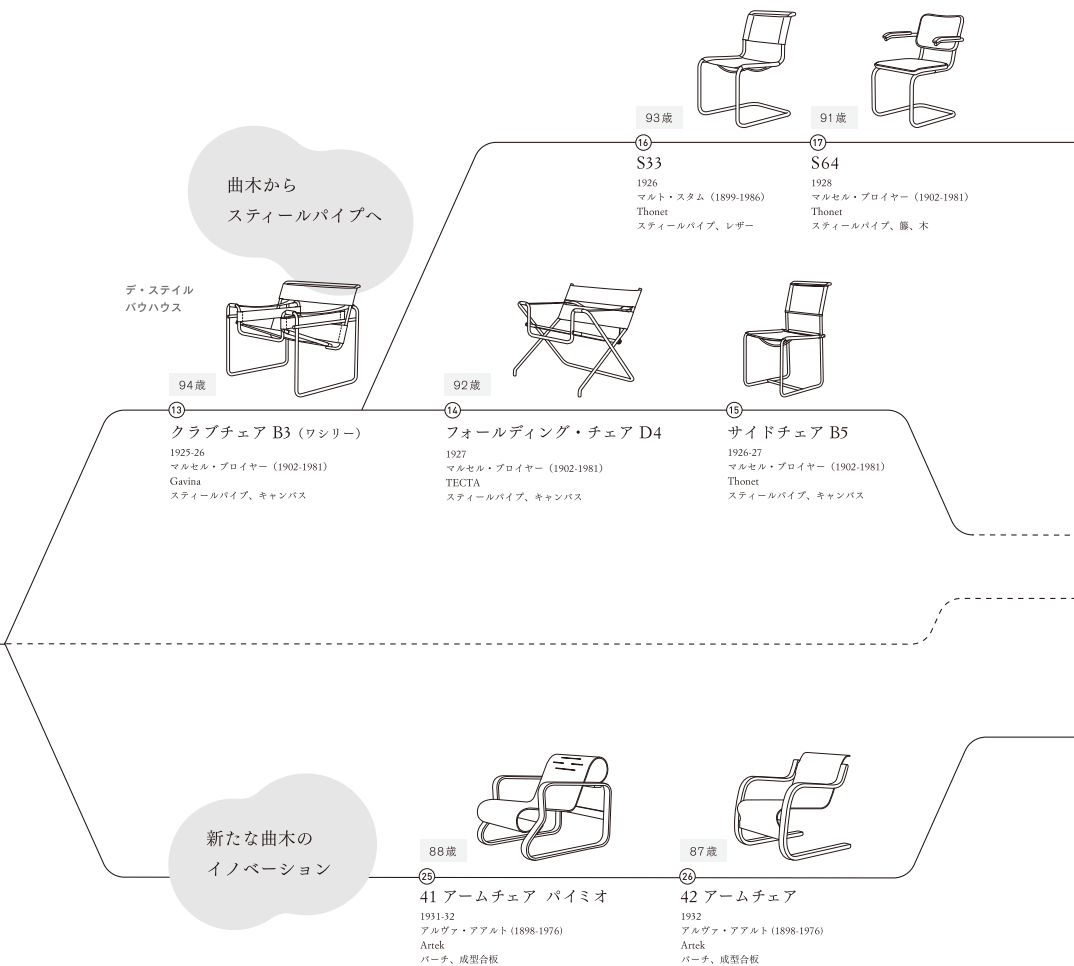
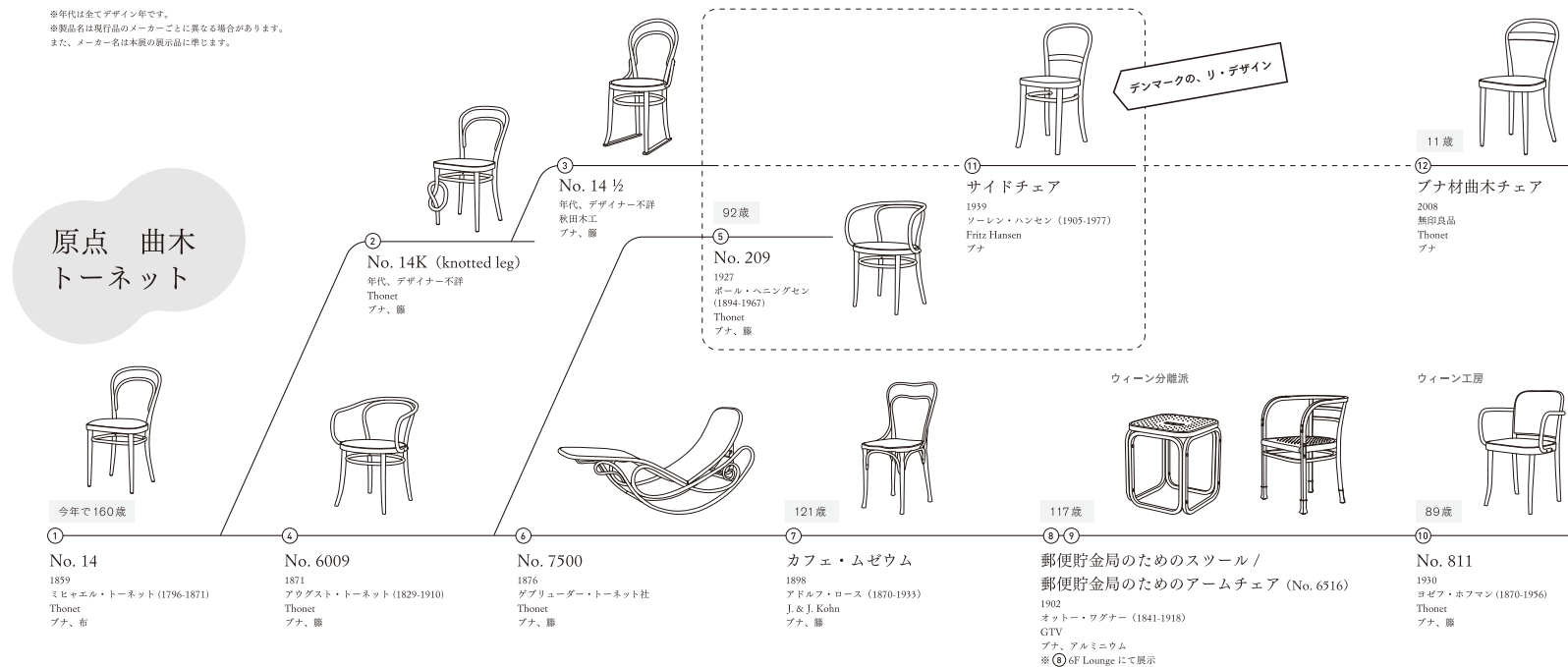
year

designer

manufacture (展示品)

material

※年代は全てデザイン年です。
 ※製品名は現行品のメーカーごとに異なる場合があります。
 また、メーカー名は本展の展示品に準じます。



- ① 今から200年を遡る1819年、ミヒヤエル・トーネットは旧プロシア領ポッパルトに家具工房を開く。後に彼が新天地ウィーンで、息子たちと創設したのがゲブリューダー・トーネット社だ。ミヒヤエルはムク材の曲木技術を開発し、試行錯誤の末に完成形として発表したのがサイドチェア「No.14」だった。それは、わずか6つのパーツで構成されシンプルで軽量、ノックダウン式によって輸送コストを抑えることも成功し、マスプロダクトの礎を築くことになる真に革新的な椅子だった。「No.14」は発表から40年間で約5,000万脚が生産され、160年を経た今も複数のメーカーが生産を手がける、比類なきロングライフデザイン。
- ② 「No.14」①の脚の一本で結び目を作るという、ムク材の曲木技術の限界に挑んだ一脚。
- ③ No.14を、和式の部屋に置いても量を傷つけないようリ・デザインした、脚に畳ずりの横木を渡したモデル。
- ④ No.14と同様、6つのパーツのみで構成され、3,5Kgの軽量化を実現した椅子。「ヴィエナ・チェア」と呼ばれ、モダニズムの建築家たちから好まれた。なかでもル・コルビュジェは、1925年のパリ万博で発表した「レスブリ・ヌーヴォー館」に続き、27年に開催された住宅展「ヴァイセンホーフ・ジードルング」のために設計した住宅のインテリアにも「No.6009」を採用したことから、「ル・コルビュジェ・チェア」とも呼ばれる。
- ⑤ 照明器具の名作で知られるデンマークの建築家でデザイナー、ポール・ヘニングセンによるリ・デザイン。アーム部のカーブに微妙な違いがある。
- ⑥ トーネットは曲木技術をロッキングチェアの構造にも最適化し、複数のデザインを発表する。そのなかで、もっとも優雅なロッキング式シェーズロングと呼ばれる「No.7500」は、脚の材に、左右それぞれ8メートルもの長さのブナが使われた。1879年以降の同社のカタログには、アームレスト付きタイプが掲載されている。いずれもマスプロダクトと呼べる数は生産されなかった。

- ⑦ アドルフ・ロースが設計したウィーンのコピーハウス「カフェ・ムゼウム」のための椅子。曲木の断面の一部を楕円にすることで、曲線がより繊細に見えるよう計算されている。当時の制作は、1869年に設立されトーネットの競合となった曲木家具メーカー J.&J. コーン社が手がけた(同社は1914年に、もう一つの競合ムンドゥス社と合併、1922年にはグブリューダー・トーネット社とも合併)。
- ⑧⑨ 「機能主義建築の父」と呼ばれるワグナーが設計したウィーン「郵便貯金局」のための家具2点。アームチェアは前脚、アーム、背まで角材一本で繋ぐ構成を先駆けた一点。スツールは、規格化したフレームによる斬新な構成が以後のモダンデザインに大きな影響を与えた。ジョイント用ビスに当時の新素材アルミニウムを用いそれが意匠にもなっている。
- ⑩ 「No. 811」は、ヨゼフ・ホフマンがデザインしたとするのが一般的だが、ヨゼフ・フランクとの協働、など諸説がある。時代によっては前

脚の形状にバリエーションが見られる。ホフマンはオットー・ワグナーの弟子で、ウィーン分離派の中心的人物、ウィーン工房の設立者。

- ⑪ 「No. 14」のリ・デザイン。背もたれの横木がよりモダンなデザイン。脚の補強はリングではなくC型。
- ⑫ 「No. 14」のリ・デザイン。背もたれの背板の高さを上げてテーブルトップの位置と重なるようデザインし、脚の補強のリングをなくすことでよりシンプルな構造にした。
- ⑬ マルセル・ブロイヤーは、デッサウに移転したバウハウスで教官を務め、その時代に自転車から発想を得て、スチールパイプをフレームにした室内用のチェアを世界で初めて実現。モダニズムを体現するエポックメイキングな作品となる。トーネット・ムンドラス社は、ブロイヤーが設立したStandard Möbel社とその著作権を1929年に買っている。「B3」は時代とともに発展し、60年代にイタリアのガヴィーナ社がブロイヤーとともに調整を加えて生産したモデルによって「ワシリー」の名で

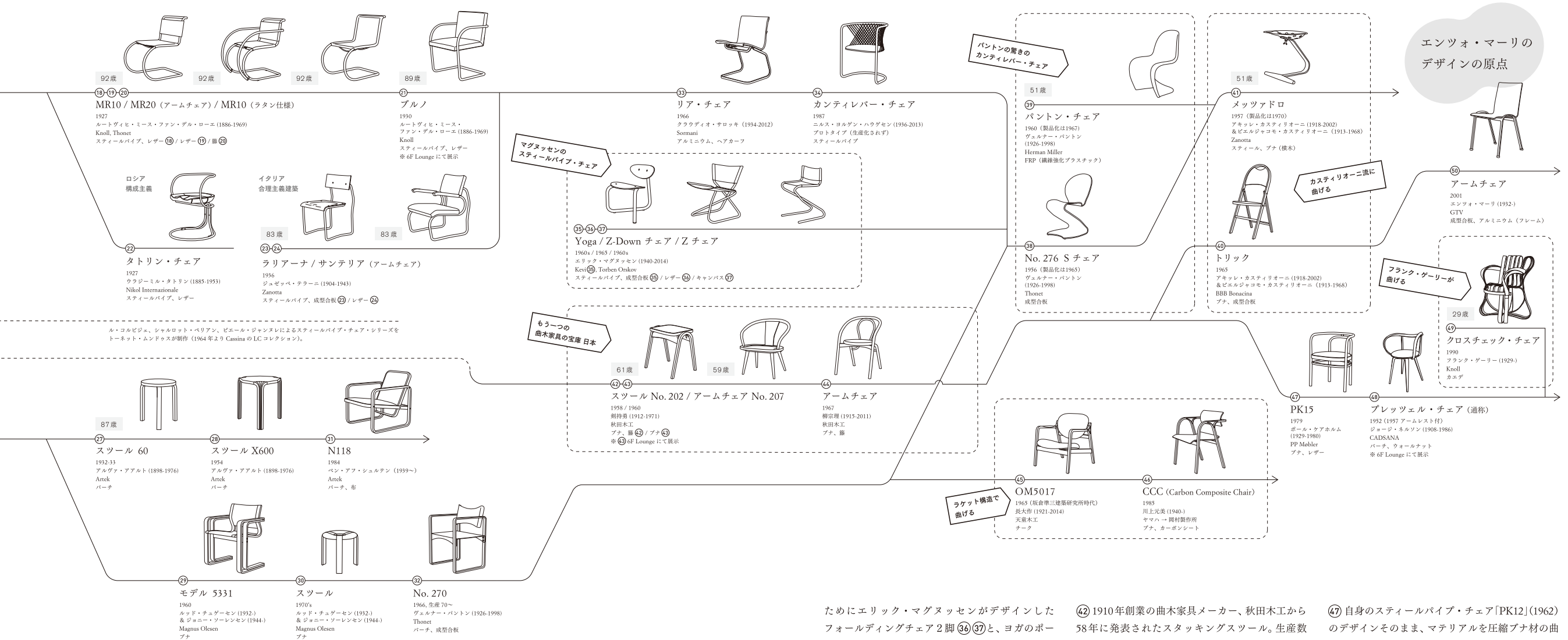
呼ばれるようになった。

- ⑭「クラブチェア B3」のバリエーションである
フォールディング・チェア。
- ⑮ スティールパイプをフレームにしたサイドチェア。
- ⑯ オランダの建築家マルト・スタムが、後ろ脚のない椅子の実現を目指し、ガス管を継いで構造実験を行ったのは1925年。完成した「S33」は、椅子の構造革命を起こした作品として歴史に刻まれている。このカンティレバー・チェアが、1927年にスチュットガルト「ヴァイセンホーフ・ジードルング」の住宅展で展示された折には、ブロイヤーとミースによる優れたバリエーションも登場し、カンティレバー・チェアは時代精神のシンボルとなった。

- ⑰「サイドチェア S32」のバリエーションである
アームチェア。アーム部から一筆描きのように曲げ
たスチールパイプと、木枠へ簾張りした座面と背
もたれのコンビネーションが、シャープななかに温
かみを感じさせる。

②5 1930年代初頭に、フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトが設計したパイミオのサナトリウムのための家具の一つ。1929年にアアルトはバウハウスの影響が色濃いスチールパイプの家具をデザインし、トーネット・ムンドゥス社のコンペに応募するなどしたが、サナトリウムのプロジェクトで、独自の構造と、モダンかつ人と自然に寄り添う温かみのあるデザインを発見した。スチールパイプに代わる積層合板曲げ加工のフレームと、有機的なフォルムの座面は、曲木、曲げパイプの再解釈とも呼べる。

- ② 同じくパイミオのサナトリウムためのプロジェクト、「42 アームチェア」では、スプリング効果を生む積層合板の曲げによるカンティレバー・アームチェアを実現した。



⑮⑯⑰ スタムのカンティレバー・チェアの荒削りなプロトタイプを見たミースが、スチールパイプの弾性を引き出す曲げによって優雅なフォルムに仕上げた。

⑳㉑ アアルトは、トゥルクの木工家具職人オッ

②1 ミースが旧チェコスロバキアの都市、プルノに設計したトゥーゲンハット邸のためのダイニングチェア。邸宅は1930年に竣工したが、施主トゥーゲンハット家はユダヤ系の実業家であったため、ナチスのユダヤ人迫害を恐れ38年にスイスに亡命。バウハウスの第3代校長を務めていたミースは、33年にナチスによって学校を閉鎖されたのちアメリカに移民しモダニズム建築の巨匠の地位を築いた。

②② 1910年代に起こったロシア構成主義の主導的芸術家であるタトリンが、自身で制作した曲木のプロトタイプをもとに後年、イタリアのメーカーが製品化したカンティレバー・チェア。タトリンは鳥型飛行装置「カントリン」の開発に取組むなど、飛翔、浮遊にも強い関心を持っていた。

②⑨③⑩ ルッド・チューゲーセン&ジョニー・ソーレンセンは、デンマークのマグナス・オルセン社から発表した家具の数々で知られるデザインユニット。[5331]はダブルフレームによるカンティレバー・チェアのバリエーション。「スツール」は、成

23 24 イタリア合理主義建築を代表する、ジュゼッペ・テラーニが、ムッソリーニ政権下にコモ市に設計した「カーサ・デル・ファッショ」のための家具を、

ザノッタ社が83年より生産したモデル。カンティ
レバー構造のバリエーション。

27 28 アアルトは、トゥルクの木工家具職人オット・コルホーネンと協働し、パチ材の活用と技術の開発に取り組む。こうして生まれたのが、ムク材の上部にのみ切れ目を入れ、ラメラと呼ばれる薄い木質を挟んで曲げて固定する「L-レグ」で、この技術を初めて応用したのが「スツール 60」。ロングライフデザインのシンボルの一つとなった。二人はL-レグを基本に、曲木の世界にさらに革新を起し、L-レグ 2 本を組み合わせて 90 度角に広げた「Y-レグ」、さらに扇子状にカットした L-レグ 5 本をまとめた「X-レグ」(ファンレグ)が誕生した。

(29)(30) ルット・チュゲーセン&ジョニー・ソーレンセンは、デンマークのマグナス・オルセン社から発表した家具の数々で知られるデザインユニット。「5331」はダブルフレームによるカンティレバー・チェアのバリエーション。「スツール」は、成型合板の脚と黒に染めた座面の組み合わせが新鮮なデザイン。ちなみに彼らの代表作は、ほぞ、だばなしで座面に脚を差し込むなどの、組み立てシステムによって、「No. 14」以来の量産化とバリエー

ションを実現したと言われるスツール「8000シリーズ」(展示品外)。

③1 ペン・アブ・シュルテンは、60年代からアルテック社で働き76年から28年間、同社のアートディレクターを務めた、アアルトのDNAを継承するフィンランドのデザイナー。「N118」はラメラを差し込む曲げ技術を現代に引き継ぐモデル。

③② デンマークのデザイナー、ヴェルナー・パントンによる、積層合板のフレームのアームチェア。座面と、背は成型合板で、フレームにビス止め。この時期パントンはすでに、トーネット社と成形合板のカティレバー・チェア③⑧の製品化に成功している。

③ イタリア人デザイナー、サロッキのカンティレバー・チェア。彼はソルマーニ社と共働し、アルミニウム合金の活用を研究したことで知られる。

③4 カンティレバーのフレームから、メッシュで座面を吊ったユニークな椅子。デンマークのデザイナー、ニルス・ヨルゲン・ハウゲセンのプロトタイプ。

③⑤③⑥③⑦ デンマーク、トーベン・オルスコフ社の

ためにエリック・マグヌッセンがデザインした
フォールディングチェア2脚(36)(37)と、ヨガのポ
ーズをとっているようなスチールパイプのチェア。
限られた数しか生産されなかった希少なモデル。今
なお人々を惹きつけるマグヌッセンのスチール
パイプ・チェアへの再評価が待たれる。

③⑧ ③⑨ パントン作の2脚は、本展では例外となるマテリアルを使用している。「シェア」は成型合板によるもの、「パントン・シェア」はプラスチック一体成型によるもの。後者のプラスチックは当時のFRPから変遷を経て、環境への配慮からポリプロピレンへと変わっている。ちなみに発売当時は、「パントン・シェア」以前にすでに同様のカンティレバー・シェアが提案されていたなどと、論争が巻き起こったという。

④①「トリック」はトーンネットのフォールディングチェアのリ・デザイン。背もたれをハイバックにしている。「メツァドロ」は、座面に既成のトラクター・シートを利用したレディメイド的手法の画期的な椅子として評価される。同時に注目したいのは、この作品が、20世紀初頭に発明されたトラクターの椅子がすでに片持ち構造だった、という情報を伝えていること。カスティルペ・チェアは誰が発明したのか?というスタムとプレイヤーの間で戦わされた論争へ向けた、これはカスティリオーネ流のアイロニーなのかもしれない。彼らの答えはアノニマスデザインのなかにある。

④2 1910年創業の曲木家具メーカー、秋田木工から1958年に発表されたスタッキングスツール。生産数120万台を超える現行品で、日本のロングライフデザインのシンボルの一つ。秋田木工1938年のカタログに掲載された「重ね型角形卓子」をスツールへと、リ・デザインしたと考えられる名作。

④3 座面高は38cm。当時の日本を代表するデザイナーたちは座面高の低い椅子を次々発表し、それは現代のライフスタイルで再び歓迎されている。

④④ 曲木の魅力を十全に引き出し、見る角度によって異なる姿を現わすアームチェア。柳はこれを緻密に設計し、機能的なスタッキングチェアに仕上げた。

(45) 長大作は、師である坂倉準三が会場構成を手がけた1960年のミラノトリエンナーレで、日本で初めてラケット構造を応用した椅子を出品した。その数年後に、上野の国立西洋美術館のためにデザインしたラウンジチェアが本作品。駒を入れたラケット構造のフレームと、積層合板の模様を見せたアームレストに注目したい。

④⑥ テニスラケットに使用されるカーボンシートの軽さと弾性に着目し、それを応用して新たな曲木に挑んだプロジェクト。発表当時はラケット構造のノウハウを持つヤマハが製作した。

④7 自身のスチールパイプ・チェア「PK12」(1962)のデザインそのまま、マテリアルを圧縮ブナ材の曲木に代えた椅子。補強のため2つのパーツがプラスされている。ケアホルムの貴重な曲木の椅子。

④⑧ トーネットのクラシックなモデルからアイデアを得た、積層合板アームチェア。

④9 ゲーリーは既存の概念にとらわれない彼の建築のようにユニークな「クロスチェック・チェア」を、90年にノル社から発表。それはリボン状のホワイトメープルの薄いベニヤを編み、ビスを使わず接着によって固定した椅子だ。提案当時は実現不可能とされたプロジェクトだったが、ノル社のもとでゲーリー自らが精力的に開発に取り組み形にした。曲木の可能性はまだ未来に続くことを感じさせる作品。

⑤0 マーリは、ゲブリュダー・トーネット・ヴィエナのために、アルミニウムチューブを曲げたフレームと成型合板の座面をコンビネーションしたチェアなど、一連のコレクションをデザインする。トーネットは工業デザインの原点であり、No. 14はマーリにとって「椅子以上の存在」。ミハエル・トーネットがマスプロダクトへの扉を開き、社会に長く愛されるスタンダードを提供したことに、マーリはデザインのユートピアを見て、それを継承している。